



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二一三号）

霜降 そうこう

十月二十四日

絵馬

神社でよく見かける絵馬。人々の様々な願いが名前とともに記されています。もともとは神の乗り物とされる馬を神聖に考え、祈願するときに馬を奉納したのが始まりと知られています。今では、祭りの際は神輿みこしに神霊しんれいをうつしますが、古代の絵には馬に神の依代よりしろである鏡や神をつけているものがあり、神と馬の関わりが深いことがわかります。

先日、京都の上賀茂神社（賀茂別雷神社）（かもわけいかずち）で第四十二回式年遷宮を記念して復元された長さ約八メートルの絵馬を拝見しました。幕末、孝明天皇こうめいが第十四代將軍の徳川家茂と一橋慶喜を伴って同神社に参拝した様子が描かれています。以前の絵馬は絵の具が薄れ、何が描かれているのかわからなくなっていたのですが、赤外線分析で判明し、復元されました。

その際、長さ八メートルにおよぶ杉板を入手するのに大変苦労されたそうです。こうした奉納絵馬は、杉板が使われることが多いのですが、材木商の方に杉板の特性をうかがいました。

杉の木目は、赤茶色の部分が冬に育ったところ、白い部分が夏に育ったところだそうです。そして年月が経つと、白い部分がしぼみ、赤い部分が浮き立ってくるため、絵柄が立体的に見えるという話でした。

今でこそ3D映画などで立体的な映像を見ることができますが、日本では木目が浮き出す杉板の奉納絵馬などで絵を立体的に見ていたことになりました。木をキャンバスにした絵の妙味というのでしょうか、木とともに生きてきた日本人の感性を思わずにはいられませんでした。祈りを形にした絵馬、年月を経ても楽しみは増します。

文 千種清美

